



**Data** 2022-129

監督・脚本：ペドロ・アルモドバル  
出演：ペネロペ・クルス／ミレナ・スミット／イスラエル・エレハルデ／アイタナ・サンチェス＝ギヨン／ロッシ・デ・パルマ／フリエタ・セラノ

## 👁️👁️ みどころ

母と娘を描く映画は、『八日目の蟬』（11年）をはじめとして名作が多い。また、子供の取り違え事件を描く映画も、『そして父になる』（13年）等たくさんある。しかして、同じ日に、同じ病院で、2人の女性が女の子を出産した本作の物語は如何に？

中国映画『ジャスミンの花開く（茉莉花開／Jasmine Women）』（04年）は「チャン・ツイイーの、チャン・ツイイーによる、チャン・ツイイーのための映画」だったが、本作は「ペネロペ・クルスの、ペネロペ・クルスによる、ペネロペ・クルスのための映画」。今なお、若さと美貌と美しいスタイルを保っている彼女が、第78回ヴェネチア国際映画祭・最優秀女優賞を受賞したのは当然だ。

しかし、しかし……。スペインの巨匠ペドロ・アルモドバルが描く本作は、ラストに向けて、本筋（？）とは違う全く別のテーマが登場してくるので、それにも注目！もともと、その賛否は……？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■この監督に注目！この女優に注目！■□■

最新作『ペイン・アンド・グローリー』（19年）（『シネマ47』79頁）はイマイチだったが、ペドロ・アルモドバル監督は1951年生まれのスペインの巨匠。『トーク・トゥー・ハー』（02年）（『シネマ3』208頁）も、『ボルベールー帰郷』（06年）（『シネマ13』198頁）も素晴らしい映画だった。

そのペドロ・アルモドバル監督のミュージズとも言うべき美人女優が、ペネロペ・クルス。年を経るにつれて娘役から母親役に移っていくのは当然だが、本作冒頭に見るカメラウーマン、ジャニス（ペネロペ・クルス）のスタイルは抜群。まだまだ母親役でなく娘役でも

十分務まると思うのだが、本作に見るジャニスとはカメラウーマン活動の中で、撮影対象であったはずの男アルトゥロ（イスラエル・エレハルデ）との間に子供が生まれることに。しかし、アルトゥロは妻帯者だったから、その仲はいわゆる不倫。したがって、女の子が生まれたジャニスは、シングルマザーとしてカメラウーマンを続けることに。

こんな場合、日本なら離婚がどうなる？認知はどうなる？養育費はどうなる？等々の問題が発生するはずだが、本作ではそんな些細な（？）問題は一切描かれない。本作でペネロペ・クルスは、第78回ヴェネチア国際映画祭・最優秀女優賞を受賞したが、それはペドロ・アルモドバル監督が本作に求めたテーマと、ペネロペ・クルスの演技がピッタリ合致したためだ。本作に見るペネロペ・クルスのシングルマザーとして、またカメラウーマンとしての活発な活動に注目！

### ■□■同じ日に同じ部屋で、2人の女性が女の子を出産！■□■

出産シーンがスクリーンに登場する映画は多い。私が最も印象に残っているそれは、「チャン・ツイイーの、チャン・ツイイーによる、チャン・ツイイーのための映画」と私が称した『ジャスミンの花開く（茉莉花開／Jasmine Women）』（04年）（『シネマ17』192頁）における雨の中での出産シーンだ。それに比べれば、個室でなく2人部屋ながらも、病院の中で出産できるジャニスは幸せだ。同室の妊婦は想定外の妊娠に戸惑っている17歳のアナ（ミレナ・スミット）。2人の出産シーンはそれなりの迫力があるが、ペネロペ・クルスが主演女優賞をゲットしたのは、もちろんその演技によってではない。

出産を無事に完了した二人は「また、いつかどこかで・・・。」と、言葉をかけ合い、互いに自分が産んだ赤ん坊を抱いて病院を後にし、それぞれの人生に向かっていったが、同じ日に、同じ部屋で2人の女性が女の子を出産したのは全くの偶然。この2人が再度会うことはないだろう。普通はそうだが、さて本作では・・・？

### ■□■母は強し！この奮闘に注目！なぜDNA親子鑑定を？■□■

かつてのアグネス・チャンを見ても、松田聖子を見ても、第一線での歌手活動を維持しながら母親の役割をしっかりと果たす姿を見ていると、つくづく、「母は強し！」と思えてくる。ましてや、本作のジャニスはカメラウーマンとして自力で稼ぎながらシングルマザーとして、愛娘セシリアを立派に育てていたから、その奮闘はすごい。一気に“母性本能”が花開いたそんなジャニスに注目だが、アルトゥロから、「僕にあまり似ていない！」と言われると、たしかに・・・？

このアルトゥロは有名な考古学者で、ジャニスがポートレート撮影の対象としていた男。しかし、なぜそんな妻帯者で初老の男（？）アルトゥロがセシリアの父親になっているの？そんな疑問も湧くが、写真撮影中にジャニスが「スペイン内戦で殺害された自分の曾祖父ら9人の男性の集団墓地を発掘することは可能か？」と質問するシークエンスがあり、これが本筋のストーリーとは別の、ある伏線になるので、それにも注目！

認知をめぐる裁判では、父子関係の存否を判断するためにDNA鑑定が行われることが

あるが、近時はコロナの簡易検査キットと同じような、DNAの親子鑑定キットなるものがあるらしい。そこで、ある日、意を決してジャニスがそれをやってみると・・・？母子関係の確定がこんなに簡単なキットでできることにビックリだが、それって本当に信用できるの？そればかりか、後に登場するストーリーの中では、この簡易キットの鑑定によって、母子関係の存在が100%近い確率で認められたそうだから、それにもビックリ！

## ■□■そんなバカな！この子の真の母親は？すると父親は？■□■

病院内での新生児の取り違え。そんなことが度々あっては困るが、稀にそういうことがあることは、『そして父になる』（13年）（『シネマ31』39頁）を観ればわかる。6年間育ててきた息子が他人の子供だった？そんなバカな！そんな現実を前に、「血を優先？それとも時間を優先？」をテーマに、是枝裕和監督が問題提起した同作は興味深かった。

同作は2組の夫婦の葛藤を中心に描いていたが、本作では、セシリアとの母子関係がないことを知らされたジャニスがある日、偶然、アナと再会するところから、全く想定外の物語が進展していく。そこでのポイントの第1は、再会したアナから、アナが生んだ子が乳児突然死なるもので亡くなったと知らされたこと。第2は、レストランでバイトをして食い繋いでいるアナを、ジャニスがベビーシッターとして雇い入れること。第3は、母性本能がないと自覚し、売れない女優業を続けていたアナの母親、テレサ（アイタナ・サンチェス＝ギヨン）が、あるオーディションに合格したことをきっかけに自立の道を選んだため、再びアナが独りぼっちになってしまうことだ。

1人の女の子育てを共通の目的とするジャニスとアナがある日、同性愛に陥っていく姿は意外だが、なるほど、性行動が自由なヨーロッパではそれもあり！しかし、今、ジャニスが育てている女の子セシリアがホントにアナの子供だとすると、その父親は誰？その肝心のテーマがどうなるかについて、本作のアプローチは如何に？

他方、ベビーシッターとして頑張っているアナはセシリアがジャニスの子供だと信じていたが、ジャニスは、いつ、真相をアナに打ち明けるの？前述のとおり、私は簡易キットによる鑑定結果についていささか疑問があるため、本作の脚本にも疑問があるが、それはともかく、ジャニスから“あつと驚く真相”を聞かされたアナの対応は？

## ■□■母娘の物語あれこれ。子供の取り違えあれこれ。■□■

近時、母娘の物語をテーマにした映画は多い。私は井上真央と石田エリ共演の『わたしのお母さん』（22年）や湊かなえの原作を映画化した『母性』（22年）を相次いで観たし、中国映画『こんにちは、わたしのお母さん』（21年）（『シネマ50』192頁）の面白さに感動した。また、前述した『そして父になる』（13年）は、父親を主人公にした新生児の取り違え事件だったが、本作は同じ日に、同じ病院内で、同時に母親になったジャニスとアナの視点による子供の取り違え事件だから、ジャニスのショックはより大きいはずだ。したがって、アルトゥロからの言葉を受けた行動によってその事実を知ったジャニ

スがどうするか？つまり、アナにその事実を打ち明けるのか否か？打ち明けるとしたら、いつどういうタイミングで？それが最大のポイントになるはずだ。

私はそんな思いで本作中盤を観ていたが、ジャニスにはセシリアが自分の子供ではなく、アナの子供だとわかった後も、なかなかそれを打ち明けず、アナをベビーシッターとして雇い続けた上、同性愛の関係にハマったままだったからアレレ……。これは一体どうなっていくの？

## ■□■スペイン映画は奥が深い。巨匠の想いはこんなに複雑！■□■

本作は2人の母親の物語だから、男（夫）の存在感が薄いのは仕方がない。セシリアの父親であるはずのアルトゥロは、「この子は僕に似ていない。」などと平気で言うし、アナの父親については、アナが告白した通り、三人の男によるレイプ事件による妊娠だから、父親が誰かはアナ自身もわからないらしい。また、セシリアがジャニスの子供ではなくアナの子供であることがわかったということは、乳児突然死で死亡した子供がジャニスとアルトゥロの子供だったということになるから、そんな事実がわかれば、アルトゥロも涙の1つくらい流しそうなものだが、本作にはそのような描写は一切ないからアレレ……。

しかし、それに代わって(?) スペイン生まれの巨匠ペドロ・アルモドバルらしく、本作後半はフランコ内戦時代の“ある悲劇”が描かれていくので、それに注目！セシリアの父親がかっこいい若者ではなく、考古学者のアルトゥロだったのはその伏線だ。つまり、セシリアの母親は誰？父親は誰？という問題とは全く別に、本作導入部で「スペイン内戦で殺された自分の曾祖父ら9人の男性の集団墓地を発掘することは可能か？」と質問していた答えらしきものが、アルトゥロからもたらされる中、本作ラストにかけて意外な展開を見せていくので、それにも注目！集団墓地の情報を得たジャニスは、直ちにジャニスを育ててくれた祖母のいる田舎を訪れたが、そこで、祖母から聞いたのは、自分の父親は街の男たちと一緒に殺害され、戻ってこなかったという話。その時、祖母はまだ赤ん坊で、父親は赤ん坊のガラガラオモチャを抱いて亡くなったらしい。なるほど、なるほど。しかし、ペドロ・アルモドバル監督は本作にそんなストーリーを持ち込んだの？

『キネマ旬報11月下旬号』の「REVIEW 日本映画&外国映画」(88頁)では、本作に3人の評論家が星4つ、5つ、4つをつけており、その1人は「一方の母親の個人史を形成するスペイン内戦の民族的記憶がかえって話を薄めてしまったようだ。」「バランス悪く傑作になりそびれた感。」と、書いている。他方、もう1人は『親子の取り違え』という主題もアルモドバルの手にかかると、苦い勝利を落とし所とする家族劇からは遠く離れて、フランコ政権の暗い記憶さえも踏み越える力強い肯定の歩みへと変わる。」と、絶賛している。私は本作の描き方にあまり賛成できないが、さて、あなたは？

2022(令和4)年11月28日記